

# かささぎ通信 第115号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2022年 6月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年五月「森三郎の作品を読む会」では、「蛙」の読み比べ『赤い鳥』[1932.8]と少国民文芸選『かやへぎ物語』[1942.8]（帝国教育会出版部）をしました。

「蛙」は平安時代前期の能書家で知られる小野道風の話です。道風と蛙と言えば、書の道に行き詰った道風が、蛙が何度失敗してもめげずにととうとう柳の葉に飛びつく様子を見て、自らももう一度努力を重ねるといふ逸話が、森三郎の尋常小学校二年生の頃には「国語読本」に載っていました（森三郎の作品を読む会）通信第17号、本会の会誌『かささぎ』創刊号参照）。

しかし森三郎の「蛙」はそういう良く知られた話とは全く別の話です。この話の中の道風は十五にもなるのに、学問などはお構いなしで、いたずらの種ばかり探していました。蛙を柳に飛び付かせるのもいたずらの一例でした。ところが、いつも道風のいたずらにやり込められている兄や従妹（いとこ）が蛙を小道具にして思いついたずらにのせられて、道風は手習いに取り組むようになります。柳に蛙が飛び付く姿を見て「へえ、こいつめ、とびついちまったよ。おどろいたね」と感心していただきますから、まさに「瓢箪から駒」で、何かのきっかけでやる気を起こしたこの年代の子どもの姿を描いていると言えます。

鈴木三重吉は三郎に葉書で「蛙」についてこんな風に言っています。「蛙」は、とても傑作です。表現もすつかり整頓し、もう手ばなしで歩ける形です。お祝ひします。難有いです。「蛙」は、ほとんど、一まいに一つぐら「ぬ」しか直しがありません。それも半分は、直した方がよいのはたしかですが、半分は私の特有のくせのみで、直さなくともいゝものかも知れません。萬歳〜。五月十九日 鈴木三重吉（『鈴木三重吉全集』第六巻、p.590）

今回の読み比べの特徴としては、『赤い鳥』の話には父の小野葛弦についての説明があり、これが実話であるような信憑性を与えています。しかし帝国教育会出版部版には、父の名前も出てきませんし、歴史的な

背景の説明をできるだけ少なくして、話の展開を速めています。

森三郎の『赤い鳥』初期の話には古典に題材を採った話が多くあります。これまで森三郎作品を読み通してきて気づいたことですが、古典そのものを分かりやすく書き改めた話と、主人公は実在した人物にしても、話の中身は三郎の創作との二種類がありました。

例えば、森三郎の「虎」（『赤い鳥』1932.2）の主人公の設定は「支那の山西省の西関という小さな町の近くの近くのある村に住む陳という若者」と具体的です。ある時、道に迷い込んで虎の穴に落ちてしまいます。二匹の子虎を育てていた母虎が陳を子虎と一緒に食べさせ、最後には町の近くまで送ってくれます。感謝の気持ちを表したい陳でしたが、間違えて虎は町の人に捕らえられてしまいます。最後には陳の言い分が聞き届けられ、虎は子虎たちへのお土産をくわえて、無事山に帰ります。この話には何か原話があるのではないかと、長い間探してきました。兄の森鏡三は一九四三年に『瑠璃の壺』という中国の童話集を出し、『唐代小説』『太平広記』『太平御覧』『列仙伝』『聊齋志異』などを典拠に挙げています。そのような本の中に森三郎の「虎」の典拠もあるかもしれません。しかし、東京大学附属図書館「PARL」の荒木達雄氏に何うと「虎が人をさらい、害することなく面倒を見たという話、虎が人を故郷や家へ送り返してくれるという話は中国の古い故事のなかではいくつも見ることでできる」「中国の虎故事に珍しくないモチーフを組み合わせて創作された物語である可能性もある」ということです。具体的な地名人名が設定されているからと言って、そっくりな原話があるわけではないということになります。この「虎」も今回の「蛙」も、似たような古典にヒントを得た三郎自身の創作であると考えられそうな気がしてきました。

次回予定 二〇二二年七月八日（金）午後一時半〜三時半

読み比べ「梅の木」（『赤い鳥』[1933.1]）と 少国民文芸選『かやへぎ物語』[1942.8]（帝国教育会出版部）

②「向日葵（ひまわり）」（『うぐいすの謎』1943年所収）